



【第141号 目次】

- ・教育コラム「磨」
- ・まなnetの玉手箱
- ・お知らせ
- ・速報



磨

養護教諭研修について

中堅教員・人権教育・専門研修担当

ほとんどの学校において、養護教諭は一校に一名配置される一人職で、【図】に示した職務を一人で担っています。

高知県教育センターでは、新規採用養護教諭、2年経験者養護教諭に対しては、児童生徒理解に基づいた保健指導や保健管理等の実践的指導力を育成するとともに、セルフマネジメント力の向上を図ることを目的として、また、中堅の養護教諭に対しては、専門力を追求することで実践的指導力をさらに向上させるとともに、チームマネジメント力の確立を図ることを目的として、県内の公立小・中学校、義務教育学校並びに県立の高等学校及び特別支援学校の養護教諭に各年次の目的に応じた研修を計画し、実施しています。

上記のうち10月に合同で開催した「2年経験者研修（養護教諭）」と「中堅教諭等資質向上研修（養護教諭）」について紹介します。

この合同の実践研修は、【図】の職務内容のうち「3 救急処置及び救急体制に関すること」の研修として、「学校保健における危機管理・救急処置」について、高知大学医学部災害・救急医療学講座 西山 謹吾教授及び高知市消防局救急課の方を招聘し、講義・演習を行いました。

講義内容を踏まえ、「体育や家庭科の授業の中での事故」、「休み時間に起こった事故」、「大地震発生に伴った事故」等を想定した場合の対応について演習を行い、講師から指導・助言をいただきながら救急処置について学びました。消防局と連携したこの演習は毎年緊迫感のある中で行われ、適宜、講師から指導やアドバイスもいただけるため、受講者からの評価が高い研修です。特に、経験年数が浅い養護教諭は事故や怪我の現場でとっさの判断や処置に不安が大きいので、このような講義やロールプレイを通して、事故発生時に「何ができるのか、何をしなければならないのか」について、体験を通して学ぶことができる実りの多い研修となっています。下に、受講者の研修の記録からの抜粋をあげています。

養護教諭の職務内容

- 1 学校保健情報の把握に関すること
- 2 保健指導・保健学習に関すること
- 3 救急処置及び救急体制に関すること
- 4 健康相談活動に関すること
- 5 健康診断・健康相談に関すること
(定期・臨時の健康診断の立案、準備、指導、評価等)
- 6 学校環境衛生に関すること
- 7 学校保健に関する各種計画・活動及びそれらの運営への参画等に関すること
- 8 伝染病の予防に関すること
- 9 保健室の運営に関すること



【図】



【受講者の研修の記録から抜粋】

- ★演習では、グループで対応を考える際、優先順位や適切な処置について迷う場面が多くあった。救急隊や医療機関へつなぐための養護教諭としての予見義務、悪結果回避義務を適切に果たせるよう日頃の業務の中でしっかりと責任感もち対応していきたいと思った。
- ★演習を通して気付くことがたくさんあった。誰が指揮命令を行うのか、救急車要請はどのように行うのか、家庭への連絡等の役割分担等について、とっさの状況の中でも適切に行えるように、フロー図や事故発生時の記録用紙を作成しておくことが重要だと感じた。同時に、記録用紙や緊急連絡カードの所在についても、教職員に周知しておかなければならないと思った。
- ★本日は詳しい処置の仕方についても教えていただき大変勉強になった。勤務校に持ち帰り、今日の反省や学びを学校で共有し、見直し等を図りたいと思う。



まな net の玉手箱

開けて切なかりし玉手箱

東部教科研究センター 指導アドバイザー 岡村 裕子

玉手箱の原稿を担当することになって、何を書こうかと思いついて、はたと思いついた。考える手間を省こう。自分の玉手箱を開けよう。

退職して5年、久しぶりに開けた箱の中に「玉」は一つもないが、封印していた文書の中から拾い上げたのが、2000年の11月に図書館担当で「朝の読書」を実践していたときに書いた『朝の読書』でコミュニケーションを」と題した以下の「石」である。一部を抜粋編集した。

(略) その当時、問題行動が校内外に噴出し、学校全体が騒々しく殺伐とした空気を孕んでいた。何よりも私たち教職員にとって、生徒との信頼関係が断たれていることが目に見えるのが辛かった。

子どもたちの心は遠くにあった。私たちはなす術がなかった。生徒指導に追われ、その対策もままならず、何ともやり切れない気持ちでいたときに、「朝の読書」の提案がされた。

提案は即決した。私たちはわらにもすがりたかったのである。そして、「わら」ではなく「本」にすぎた。(略) 実践から1年、授業・部活動・生徒会活動も活発化し、対外的な体育・文化行事でも優れた成績が収められ、子どもたちに穏やかさが見えた。生徒と教師が笑顔で話し合っている。本が子どもたちと共にあり、本が学校生活の中に溶け込んだ。



学校に問題がないわけではない。しかし、2000年度2学期、始業前の学校に10分間の静寂が生まれた。生徒はあてがわれるのではなく、自分の選んだ好きな本を読むようになった。模様替えをした図書室に子どもたちは暇つぶしにではなく、本を選びに足を向けている「読書週間」の一日――

図書室前の廊下の掲示板に一枚のポスターが貼られている。それには「2000年は国会の決議により『子ども読書年』とされました」とある。今年が自分たちの「読書の年」だと知ってか知らずか、生徒たちは本を求めてそのポスターの前を歩く。

国会が「読書」を謳うよりも「朝の読書」をやるのが、はるかに子どもたちを読書に引き込む力をもっている気がする。遠くの国会議員より、今、傍らにいる友達の「この本、おもしろい」の一言が子どもたちを動かしている。家族や先生との本を介してのやりとりが、子どもの心に沁みている。



2000年の「子ども」は21世紀に大人になる。本で「豊かな心」を育んだ大人たちの集い合う21世紀の社会からは、何が生み出されるのだろうか。未知なる夢に、ふと想いを馳せる。

「朝の読書」を実践することで、本にすぎた私たちの思いに、本は黙して応えてくれた。教室の机の上に置かれた一冊に、子どもの心が映っている。明日もあさっても、朝の10分間に、本が子どもたちに語りかけている。

久方ぶりに読み返すと、当時の学校の空気が甦ってきた。教育事情も環境も指導方針も今とは大きく異なる約四半世紀前。今となっては「朝の読書」の現状すらまったく分からない。

過去から想像していた21世紀は、夢色できらきら輝いて、無限の彼方へさあ行こう、だった。

だが、現在、戦火が絶えない不穏な世界情勢、学校現場には2000年とは異なる課題が山積である。

あ那时的の中学3年生は、今、37歳。どんな日々を過ごしているのだろう。

教師として子どもたちと接してきた時間は、一体何を残してきたのか。

少なからぬ後悔を胸に湧き起こさせる玉手箱にあわてて蓋をして、知らん顔して2023年を迎えようとしている一嬢(おうな)。

※文字遣いは、当時のままにしています。

冬季閉室のお知らせ

令和4年12月28日(水)～令和5年1月4日(水)
上記期間中、教科研究センターは閉室します。



教具の貸出しについて

教科研究センターでは、アーテックロボ、コード・A・ピラー（本部のみ）やボッチャの貸出しを行っています。詳しくは、各教科研究センターにお問い合わせください。



速報



教科研究センター(本部・東部・中部・西部)

令和4年12月の利用者状況 **353名**

◆◇ご利用ありがとうございました◆◇



《 教育センターの四季：
サザンカ開花宣言！ 》

教科研究センター(本部)	高知県教育センター2階(高知市大津乙181)	TEL/FAX 088-866-3903
東部教科研究センター	安芸総合庁舎4階(安芸市矢ノ丸1-4-36)	TEL/FAX 0887-34-8051
中部教科研究センター	中部教育事務所1階(吾川郡いの町枝川2410-7)	TEL/FAX 088-893-6597
西部教科研究センター	幡多総合庁舎3階(四万十市中村山手通19)	TEL/FAX 0880-35-6251

教科研究センターホームページアドレス <https://www.kochinet.ed.jp/studycenter>